



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	語用論の観点から見た文末表現の使用：「ケド」を例にして
Author(s)	許, 夏玲
Citation	東京学芸大学紀要. 第2部門, 人文科学, 55: 59-65
Issue Date	2004-02-27
URL	http://hdl.handle.net/2309/2679
Publisher	東京学芸大学紀要出版委員会
Rights	

語用論の観点から見た文末表現の使用

「ケド」を例にして *

許 夏 玲

留学生センター **

(2003年9月30日受理)

1 . はじめに

日常会話において、話し手の意味すること（発話の意味「utterance meaning」）と、話し手の使用する語の意味すること（文意または語意「sentence or word meaning」）は常に同じことを表しているとは限らない。たとえば、話し手が聞き手に「今日の午後会議がありますけど」と言ったとき、発話状況によって話し手が聞き手に自分の提供した事実情報に対してどのような判断を下すかを聞いているのか、聞き手の誘いを断っているのか、会議のときに私が皆の意見を聞こうかという意味で聞き手に何か提案しているのかといった多義的な発話の意味が解釈できる。

日本人の発話では、文を終わりまで言わず、途中で接続助詞「ケド」などによって止めてしまう傾向がみられる。¹ しかし、日本人はその場の状況などで、「ケド」などで言い終わる表現を聞いても、相手の伝達しようとしていることを難なく把握することができる。本稿では、話し言葉における文末表現のうち、「ケド」を例にして語用論の観点から分析を行う。

日常会話において、文末の「ケド」がなぜ使用されるのか、またどのように使用されるのかを考察し、聞き手が「ケド」の表現による話し手の発話意味を解釈する際に用いられる推論過程を分析する。

2 . 語用論の観点から

Levinson (1983:9) では語用論の定義を “Pragmatics is the study of those relations between language and context that are grammaticalized, or encoded in the structure of a language.” としている。要するに、語用論とは、ある言語構造に文法化された（すなわち記号化された）、言語と文脈の関係の研究である。たとえば、言語表現の発話の文脈と指示の関係を表す指標表現（「ここ」「その時」など）や照応表現（「彼女」「翌日」など）の研究は語用論の領域に含まれる。これらがいわゆる最も狭義の語用論である。一方、Green (1996) では、最も広義の語用論は、人間の意図的な行動理解を目指す研究であると述べられている。広義の語用論の中心的概念には所信 (belief)、意図 (intention)、計画 (plan)、行為 (act) が含まれている。

本稿で言う語用論とは広義の語用論のことを指す。文末の「ケド」に関してGrice (1975) の「協調の原理 (Cooperative Principle)」、Brown & Levinson (1978) の「ポライトネス理論 (Politeness Theory)」及びSperber & Wilson (1986) の「関連性理論 (Relevance Theory)」の観点から分析を進めていきたい。

* A Study on the Sentence-Ending Particle KEDO from a Viewpoint of Pragmatics / Harling HUI

** 東京学芸大学 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

2.1 協調の原理 (Grice 1975)

日常会話において、話し手の発話以前に聞き手が既に文脈を共有していると考えられる場合には、話し手は相手が考えていると思われることを想定し、情報に過不足のないように相手の持っていない新情報のみを加え、伝えようとする。

Grice (1975) は、会話の参加者は協調の原理 (Cooperative Principle: 話し手は今行われている会話の方向や目的に矛盾しない形で言語伝達を行う) に従わなければならないと仮定した。さらに、協調原理が働いている際、会話の参加者が会話の格率 (Conversational Maxims) を守らなければならないと言う。

Griceで述べられている「会話の格率 (Conversational Maxims)」は次のようにまとめられる。

量の格率 (Maxim of Quantity)

- a) 必要な情報はすべて提供する。
- b) 必要以上の情報の提供はさける。

質の格率 (Maxim of Quality)

- a) 偽と考えられることは言わない。
- b) 十分な根拠を欠くことは言わない。

関係の格率 (Maxim of Relation)

無関係なことは言わない。

様態の格率 (Maxim of Manner)

- a) わかりにくい表現はさける。
- b) 曖昧な表現はさける。
- c) できるだけ簡潔に表現する。
- d) 秩序立った表現をする。

日常では、話し手がどのような「会話の格率」を遵守しながら会話を行っているのか、ここで先ず例(1)を見てみよう。

- (1) 実「こんな風にさ、全部集まったのなんか、一年ぶりぐらいじゃないの。みんな、仕事持ちちまって、忙しくて、つまんなくなったよなあ」
 健一「そうだな」
 良雄「はじめはほとんど、仕事おぼえるので余裕なかったけど」
 陽子「少し、楽になって来たんじゃない？」 『ふぞろいⅡ』

接続助詞「ケド」の本来の用法(従属節の一部としての意味用法)は内容の衝突する事柄を対比的に結びつけること(逆接)である。文末の「ケド」はこの本来の用法を引き継いだものであり、話し手はその置かれている状況と対比する情報を取り上げて補足説明をするときに使われる。(1)では、話し手は発話場面や文脈から聞き手の頭の中にあると考えられるある「所与の命題」(「今は仕事にもだいが慣れてきて、時間とこころの余裕もあるので、皆で集まることができた」)を想定し、「付け加えの命題」に「ケド」を付けて提示することによって、「所与命題」に対する補足説明を表していることを理解してもらうのである。上記のような文末の「ケド」の使用はGrice(1975)で述べられている会話の格率に従って行われていると考えられる。

しかし、日常会話において、話し手が協調の原理を前提としながら、会話の格率の量(Maxim of Quantity)、質(Maxim of Quality)、関係(Maxim of Relation)、様態(Maxim of Manner)のいくつかの違反を犯すことがある。たとえば、「誘い」に使われる文末の「ケド」の表現はGriceで述べられている「会話の含意(Conversational Implicature)」²⁾による伝達の一つである。

「会話の含意」は、基本的には、次のような手順を経て算定することができる。(以下においては話し手はS、聞き手はHで示す。Sはaという発話を介してHに意図bを伝えようとする。)

- i) S は a のみを発話している。
- ii) S は会話の格率に違反しても協調の原則に違反することはない。
- iii) S は a を発話しながら b を念頭においている。
- iv) S は、会話が協力的になされるために b の仮定が必要となることが S と H の間に了解されていると考えている。
- v) S は H が b を仮定するという予測のもとに、a の発話を介して b を含意している。

たとえば、誘いや申し出の場合に使われる文末の「ケド」を例として見てみよう。

- (2) (黒沼医師が友人と歓談中の部屋へ看護婦が入ってきて)
看護婦「黒沼先生、ミーティング始まりますけど」
黒沼「すぐ行く。(略)」 『家族熱』
- (3) 健一「ああ。これ(とビニールの袋をさし出し)コンビニで適当に買ったんだ」
克彦「あ(受け取っていいかどうか、と思う)」
健一「おみやげっていうほどじゃないけど」
克彦「ありがとうございます(受け取る)」 『ふぞろいⅣ』

接続助詞「ケド」は、話し手が主節で述べられている事柄と関係している話を「ケド」で導かれる従属節で述べ、話題の導入に使うときにも使われる。このような「ケド」が文末に現れる場合、話し手は「ケド」によって自らの誘いや申し出に結びつく情報を提示し、相手に「誘い」や「申し出」などの働きかけをする。本稿では、これらの本来の用法から変化したものを「派生的用法」と呼ぶ。上記の例(2)、(3)において、話し手は聞き手に「早くミーティングに行ってほしい」((2))、「食べ物を受け取ってほしい」((3))という自分の意図 (b) を明確には表現せず、「ケド」の文 (a) のみ発話し、相手に「早くミーティングに行く」((2))、「食べ物を受け取る」((3))という行動を取ってもらおうとする。これは「様態の格率(曖昧な表現はさける)」に違反していると考えられるが、話し手は聞き手が自分の意図 (b) 「早くミーティングに行ってほしい」((2))、「食べ物を受け取ってほしい」((3))を念頭においていると仮定するならば、話し手による会話の協調の原理の違反は解消する。

以上見てきたように、Grice では、言語伝達を行う際、話し手がどのように自分の発話意味を伝えるのかに焦点を当て、分析が進められた。日常会話においては、話し手が協調の原理に従い、会話の格率を守ると同時に、対人関係に配慮し、「ケド」によって相手に間接的に働きかけることがある。これに関しては、Brown & Levinson (1978) のポライトネス理論での説明が求められる。

2.2 ポライトネス理論 (Brown & Levinson 1978)

ポライトネスは、人と人がお互いの関係を維持し発展させるためのコミュニケーションストラテジーである。日常会話において、特に依頼、要求、申し出などの場合にポライトネスを意識することは重要である。文末の「ケド」はポライトネスと深く関わっていると思われる。話し手が聞き手に必要以上の情報を提供すると、聞き手にくどい、または押し付けがましい印象を与えてしまうおそれがある。さらに、お互いの関係の維持にも影響を及ぼすことも考えられる。

また、話し手がポライトネス(たとえば、依頼や要求をする場合、相手への負担を減らし、行動の自由を拡大することや、相手との仲間意識を持つこと)を意識し、相手の判断や行動に直接影響を及ぼすような言語表現を避け、相手に何か情報を提示することによって、間接的に働きかける。

話し言葉の文末にしばしば使われる誘いや申し出の「ケド」は相手のネガティブ・フェイスを配慮し、伝達意図をほのめかすストラテジーの一つであると考えられる。³たとえば、例(4)~(6)の「ケド」はそれである。

- (4) (黒沼医師が友人と歓談中の部屋へ看護婦が入ってきて)
看護婦「黒沼先生、ミーティング始まりますけど」

黒沼「すぐ行く。(略)」『家族熱』 (例2 再掲)

- (5) 健一「ああ。これ(とビニールの袋をさし出し)コンビニで適当に買ったんだ」
 克彦「あ(受け取っていいかどうか、と思う)」
 健一「おみやげっていうほどじゃないけど」
 克彦「ありがとうございます(受け取る)」 『ふぞろいⅣ』 (例3 再掲)

- (6) 涼子「...本校のほうに通学なすったほうがいいんじゃないですか？」
 五郎「ア、イヤしかし、役場でこちらに通うようにと」
 涼子「来年の夏には廃校になるんですよここ」
 五郎「ア、ハイ」
 涼子「だからどうせならいままからそっちに通ってたほうが。なんなら私から役場へいきますけど」
 五郎「ア、イヤしかし、廃校になるまでは。 -- ぜひとこちらに」 『北の国から』

上記の例文の「ケド」は、意図されていると思われる「早く会議室に行ってくださいか」((4))、「どうぞ食べてください」((5))、「どうしましょうか」((6))に関して、話し手が聞き手にコンテクストから察してほしいと思っている。自分の「誘い」や「申し出」をうけてくれるのではないかという気持ちを表していると思われる。このように、相手を誘うまたは相手に申し出る際、話し手は自分の伝達意図を明示的に表現しないで、「ケド」で相手にヒントを与えることによってその置かれている状況から自分の意図を察してもらい、行動をとってもらおうとする。

一方、次の例(7)、(8)のように、話し手が相手に配慮し、ある命題に対する判断を示すとき、自分の判断を断言的な言い方(たとえば、「しそもない」((7))、「いいお相手だといい」((8))のような「ケド」の付かない表現)で表現するより、「ケド」によって、自分の判断に対するためらいを表す。話し手は自分のあからさまな主張を避けることによって、相手に率直に自分の意見を披露するチャンスを与え、良好な雰囲気の下で会話を持続させようとする。この文末の用法は Brown & Levinson で取り上げられたストラテジーのうち、対応させられるものはないと考えられる。

- (7) (晴江の新しい仕事について)
 陽子「(小声で)歌舞伎町とか、そういうところ？」
 健一「しそもないけど」
 陽子「そうよ」 『ふぞろいⅡ』

- (8) (娘の付き合いの相手について)
 弥生「(大吉に)それもなんだか心配よねえ。いいお相手だといいけど」
 あかり「大丈夫よ。今の若い男って全然興味ないもん。自分勝手に、そのくせ自分ではなんにも出
 来ない甘えん坊でさ、おつとめしてたって会社からいわれた仕事しかないし.....」 『渡る』

例(7)、(8)では、話し手が断言的な言い方を和らげるために、「ケド」を使ったと考える。「ケド」がない場合、話し手は断定していることになる。こうした表現は、話者のあからさまな主張という印象を与えず、相手もその状況で自分なりの判断を提示しやすくなる。

以上、文末の「ケド」の表現は「過不足のない情報の伝達」と「対人的配慮」を念頭に使用されると考えられる。「対人的配慮」は「過不足のない情報の伝達」を通してなされるものである。話し手の発話以前に聞き手が既に文脈を共有していると考えられる場合には、冗長さを避けるため、話し手は相手が考えていると思われることを想定し、情報に過不足のないように、新たな情報のみを相手に伝えようとする。一方、話し手は相手に必要にして十分な情報を伝えると同時に、相手に間接的に何か働きかけをしようとすることもある。「過不足のない情報の伝達」は間接的な働きかけという相手に配慮したコミュニケーションに利用されることがあるとも言える。

2.3 関連性と文脈理解 (Sperber & Wilson 1986)

日本人はその場の状況などで、「ケド」で言い終わる表現を聞いても、相手の伝達しようとすることを難なく把握することができる。このような文末の「ケド」の使用は、推論を利用した言語伝達の一つである。前に述べられたGriceの協調の原理は、話し手が人と会話を行う際、どのような原則を守ってどのように自分の発話意味を伝えるのかといった話し手側の視点からの分析に焦点が当てられている。Grice では、聞き手側は話し手の発話意味をどのように解釈しているのか、発話解釈に用いられる推論の過程は何であろうかに関しては明確に説明がなされていない。これに関し、Sperber & Wilson (1986) の関連性理論 (Relevance Theory) から説明が得られると考えられる。

今井 (2001) では、通常「言語伝達」とはことばによる符号化 (encoding) されたメッセージを聞き手が復号し (decoding) 、それによって得られた解読の意味とコンテキストを基に、推論 (inference) を介して発話の明意 (explicature) と暗意 (implicature) を解釈する過程であるとしている。

たとえば、「はじめに」に書かれている「今日の午後会議がありますけど」を例にして、AとBが以下のような会話をしたとする。会社の売上金をたくさん騙しとった社員Aに、社員Bがそのお金を自分にも分けてほしいと要求した。いやがっているAに「今日の午後会議がありますけど」と言った。聞き手側のAが話し手側のBの発話をコンテキストと自分の置かれている状況に照らし合わせ、推論を介して先ずBの発話の明意「今日の午後会議がありますけど、おれがお金の件をばらすぞ」を復元し、それからBの発話意味「早くおれにもお金をよこせ！」という相手への暗意と解釈できる過程に至った。

Sperber & Wilson では、人間の認知過程は、可能な限り最小の労力で可能な限り最大の認知効果 (認知環境の改善) を達成する仕組みになっていると言う。また、発話をするということは、それ自身が「最適の関連性を持つ」(Optimal Relevance) ことを当然視する行為である。「最適の関連性を持つ」ものとは発話解釈のために払うコストがなく、かつ発話の認知効果が大きく (いわば発話意味への理解度が高く) 得られるというものである。

たとえば、例(2)において、聞き手がどのように話し手の発話意味を解釈し、話し手の意図を理解するのかを次の表1で見てみよう。

表 1

例(2)における看護婦の発話「ミーティング始まりますけど」の解釈

解読過程	関連性理論に基づく推論過程
(a) 看護婦が黒沼医師に「ミーティング始まりますけど」と言った。 [ケド ₁ = 補足説明をする] [ケド ₂ = 誘いや申し出を表す] [ケド ₃ = 断言を和らげる]	看護婦の発話を解読する。
(b) 看護婦の発話はその置かれている状況にいる黒沼医師の発話意味への理解を導くのに最適な関連性を持つ (解釈のための不必要なコストを払うことなしに最大の認知効果が得られる) ものである。	看護婦の発話は伝達行為 (意図非明示的行為) だと認識される。また発話自身が関連性を持つものという期待 ⁴ が生み出される。
(c) その発話状況において、看護婦の発話は、ミーティングがもう始まるのに、まだ自分の部屋にいる黒沼医師に「早く会議室に行ってほしい」ために提示した情報と関連をつける。	当面黒沼医師にとって(b)という期待及びこの想定は最も関連性のあるものである。
(d) ミーティングが始まるのに、会議室へ行かないと、ミーティングに遅れて皆に迷惑をかけるので、早く会議室へ行かなければならない。	黒沼医師は他の可能な前提と共に、この想定が(c)という期待を満たすものと認識する。そこで、看護婦の発話是一种の暗示的な前提であることが認識される。
(e) ミーティングが始まりますケド ₂ 、早く会議室へ行っていただけますか。	黒沼医師にとって、(a)で解読された看護婦の発話は(d)と合わせて(c)という期待を満たす。これが看護婦の発話に表された明示的な意味だと認識される。
(f) (皆が待っているから) すぐに会議室へ向かってください。	(d)(e)から推論し、(c)という期待を満たす。これが看護婦の発話に表された暗示的な結論だと認識される。

表1で示したように、発話の解釈にあたって、関連性の原理に従い、発話の解読と推論の前提として使われる想定は平行して行われている。

今井(2001)によると、ある単語Wがある意味Cを持つということは、Cという概念(concept)がWによって「符号化(encode)」されていると言う。たとえば、日本語の単語「うち」には、「何かで区切られた中側」という概念、「時間・数量の一定の限度内」という概念、「(家族の集まりとしての)その人の家(の人)」という概念、「(生活の場としての)自分の住む家」という概念などが符号化されている。

上述の「概念的符号化(conceptual encoding)」を受けた単語「うち」とは違って、接続助詞「ケド」のような単語が担っている役割は、「発話意味の解釈手続きへの指針」という意味で「手続き的符号化(procedural encoding)」であると考えられる。というのは、話し手が「AケドB」という発話をする際、「AとBには『ケド』という記号で結びつけられるある種の関係がある。どういう関係かは聞き手の持つコンテキストに照らして理解できる」というふうに、「ケド」によって聞き手の発話理解へ導くための一種の案内情報が与えられる。しかし、「概念的符号化(conceptual encoding)」を受けた単語「うち」は、コンテキスト抜きでも単独で単語の意味を成しているが、「手続き的符号化(procedural encoding)」を受けた「Aケド(B)」の「ケド」の単語はコンテキスト抜きで符号化された解釈の手続きを復号することができなくなる。要するに、聞き手がある発話を聞いた場合、コンテキストに照らしながら、「ケド」によって推論を用いて発話意味を解釈するのである。

3. まとめ

本稿では、文末の「ケド」の使用に関して Grice (1975) の「協調の原理」、Brown & Levinson (1978) の「ポライトネス理論」及び Sperber & Wilson (1986) の「関連性理論」の観点から分析した。

日常会話において、話し手の発話以前に聞き手が既に文脈を共有していると考えられる場合には、話し手は相手が考えていると思われることを想定し、情報に過不足のないように相手の持っていない新情報のみを加え、伝えようとする。この際、会話の参加者は協調の原理を基に「会話の格率(Conversational Maxims)」を遵守しながら、会話を行う。また、話し手が相手に必要にして十分な情報を伝えると同時に、対人関係(ポライトネス)に配慮し、「ケド」によって相手に間接的に働きかけることがある。「ケド」のような単語が担っている役割は、「発話意味の解釈手続きへの指針」という意味で「手続き的符号化(procedural encoding)」を受けたものであると考えられる。

文末の「ケド」以外、今後の課題として話し言葉にしばしば現れる文末の「カラ」「ノニ」「テ」「パノタラ」などに関して語用論の観点から分析を進めていきたい。

参考文献

- Brown, P., & Levinson, S. (1978). *Politeness*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Green, Georgia M. (1996). *Pragmatics and Natural Language Understanding*. Lawrence Erlbaum Associates, NJ.
- Grice, H.P. (1975) "Logic and conversation". In Cole, P. and J. Morgan (eds.) (1975), 41-57. Reprinted in Grice (1989), 22-40 and in Davis (ed.) (1991), 305-315.
- 今井邦彦. (2001) 『語用論への招待』大修館
- Levinson, Stephen C. (1983). *Pragmatics*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Sperber, D., & Wilson, D. (1986). *Relevance: Communication & Cognition*. Blackwell, Oxford.

例文出典

- 『家族熱』(1982) / 『北の国から』(1981) / 『時にはいっしょに』(1986) / 『ふぞろいの林檎たちⅡ,Ⅳ』(1988) (1997) / 『渡る世間は鬼ばかり(上)』(1996)

注

- ¹ 中止，倒置，言いよどみは本稿の考察対象から除外しておく。
- ² 本稿では，例(2)，(3)の「ケド」の使用はGriceで述べられている「会話の含意」のうち，「特殊化された会話の含意 (particularized implicature)」による一種の伝達方法であると考え。「特殊化された会話の含意」は特定の前後関係に強く依存するものであるとされる。
- ³ Brown & Levinson によると，人間には，基本的欲求として，「ポジティブ・フェイス (positive face)」と「ネガティブ・フェイス (negative face)」という 2 種類のフェイスがあると言う。ポジティブ・フェイスは，他者に理解されたい，好かれたい，認められたいというプラス方向に関わる欲求であり，ネガティブ・フェイスは，他者に邪魔されたくない，立ち入られたくないというマイナス方向に関わる欲求である。また，相手のフェイスを驚かさ度合いに応じ，以下のような 5 つのストラテジーの選択がなされる。
 - (i) あからさまに述べ，相手の負担を軽減しない (without redressive action, baldly)
 - (ii) ポジティブ・ポライトネス (positive politeness)
 - (iii) ネガティブ・ポライトネス (negative politeness)
 - (iv) ほのめかず (off record)
 - (v) 相手のフェイスを脅かさない (doing no FTA <Face Threatening Act>)これらのストラテジーに関しては，Brown & Levinson (1978) を参照されたい。
- ⁴ 本稿で言う「期待 (expectation)」とは，発話意味への理解を導くのに妥当性の高い想定 (assumption) のことを指す。